

<テーマ原稿>

EAP研究所の発展に向けて期待すること

福田 早苗
Sanae Fukuda

関西福祉科学大学健康福祉学部/関西福祉科学大学EAP研究所

関西福祉科学大学EAP研究所は2004年に設置された。学部学生のインターンシップや大学院生の実習先であるとともに、大学院生や教員の研究実践を通しての発信も重要な役割の1つである。また、ナカトミファティーグケアクリニックと共同運営している精神科ショートケアである復職支援プログラムSPICEや「こころの健康と経営戦略フォーラム」やメンタルヘルス推進担当者養成講座などの多彩なプログラムも手掛けている。全国的にも大学内でEAPを抱えるところは少なく、本学の特色の一つとなっている。

大学としての特色という意味では存在感を発揮しているEAP研究所ではあるが、大学内での知名度はどうであろうか？例えば健康科学科では2・3年対象にインターンシップ科目を開講しており、その中でEAP研究所を希望しインターンシップに行くことが可能である。定員を超える志望がある年度が多く、主に養護教諭を志望する学生にとって働く人を対象とした支援について学ぶ貴重な機会となっている。また、大学院社会福祉学研究科臨床心理学専攻での実習を2006年度から受け入れている。毎年1-3名程度の大学院生を受け入れている。公認心理師の養成では産業分野は必要な分野の1つと位置付けられており今後ますますその重要性が高まると考えられる。しかしながらそれ以外の学部学生や大学院生にとっての知名度はどうであろうか？筆者も実際に調査したことがないので明らかではな

いが、知名度が高いとは言い難いと考えられる。では、教職員にとってはどうであろうか？学部学生や大学院生の実習に関連する教員は知っていると考えられるが、それ以外の教員にとっては「名前は知っているが、何をしているかはわからない」といった位置づけかもしれないと危惧している。職員にとっては人事労務や管理職を中心に年1回のフォーラムを開催している所と思っているのかもしれない。

このように対外的な存在に比べ学内で存在感を発揮できていないように思う。EAP研究所紀要に投稿原稿を募集しても、多くの教員の専門分野が合わない理由もあり投稿できる教員は極めて限られている。もう1つの原因としてEAP研究所がその使命と業務目的から大学キャンパス以外の場所にあるという点があげられる。EAP研究所は、かつては新大阪駅近く、現在は淀屋橋駅の近くにある。企業従業員の休業者のメンタルヘルスを扱うという観点から大阪市内にあることは必須である。しかしながら、そのために学内で興味関心を持たれる機会が少ないのかもしれない。もう1つは規模が小さいことから多くの学部学生や大学院生、教職員を一気に受け入れることが不可能な点である。また、対応できる教職員も少ないことから対応できる対象者の人数が限られている。

では学内で存在感を発揮するためにはいかにすべきであろうか？1つ目の提案としては、

学内での認知度調査を実施することである。それによって学内のニーズなども同時に把握する。2つ目は研究面でのかかわりである。現在少しずつではあるが復職支援プログラムの効果検証のデータが蓄積されている。このように学部学生・大学院生・教職員が興味を持つ内容についての研究ができる環境が整備されつつある。こういった研究面でかかわることができる機会を増やすのが一案であると考えられる。3つ目は実務や実習として活用する機会を増やすことである。これはマンパワーや予算などから難しい面もあるかもしれない。しかしながら、本学で養成している多くの支援職は従業員の復職支援に必要な側面を有している。例えば、栄養管理や運動療法、作業療法、心理療法、ソーシャルワークすべてが復職支援には必要な要素である。教員養成に関しては関係ないと思うかもしれない。しかしながら、教員は働き方が最も問題になっている分野の1つである。従って、働き方について大学時代に考えることはその後のキャリアを考える上で極めて重要である。4つ目は研修機関としての役割を充実させることである。大学教職員の働き方を考えることは人事・労務の担当や管理職ではなくても必要不可欠である。事実、年1回開催されるフォーラムには毎年200名近い参加者がある。

EAP研究所の使命や業務目的から対外的な広報に偏りがちではあるが、今後は学内での存在感が発揮できるような方策を考えていくことが研究所の発展につながるのではないかと考えられる。